

武奈伎考  
波之加美伊乎考

本間游清稿本

特別  
= 15  
2894







武奈伎考  
波之加美伴年考

57-2543





武三伎考

目次

- 武三伎ハ今世ノハツ目ウナキ
- 武三伎ノ名義
- 武三伎ノ漢名未詳
- 宇那支ト呼カニ出夾
- 鮮ヲ今目ウナキト訓ルハ誤
- 鱧魚ヲハツ目ウナキト云ルハ誤
- ハツ目ウナキノ目ハ目ニ非ス腮也
- 武三伎トウナギトヲ一物トスルノ誤





- ハツ目ウナギ名ノ出所
- 鮮字ハアタラ子氏和訓ノ透トナル
- ハツ目ウナギ産地
- 回珠菴胸臆子ノ説
- 但馬ニテ七目ト云

武奈伎考

本同抄傳述

武奈伎ハ今世ハハツ目ウナギ也

今人ノウナギトイル物ハ古人ハシカミイヲト云テ漢名鰻鱺魚  
 ナリ古人ノ武奈伎ト云始テ中古以來宇奈支ト呼ハツル  
 物ハ今世ノハ目ウナギニシテ今人ノ鰻鱺トイル物トハ別物  
 之漢名モ亦詳ナラスサレ厄病ヲ治スル切能ハ今世ノウナギ  
 ニマサレル事ニ倍ナリ都下ノ人々今ノ鰻鱺ノ切能ヲノミ  
 尋ラユタテハハ目ウナギヲバヤサク取用ヒス故ニ今其名ヲ呼  
 カハツル誤ヲ前ニ記シテ其切能ヲ後ニ云ヒトス



武奈伎名義

万葉集十六卷、大伴家持マノ石戸呂ノ瘦タルヲ嗤笑シテヨマ  
レシ哥二首ノ中ニ、石戸呂ル吾物申夏瘦尔吉跡云物曾  
武奈伎取食シ、本ヤ和名下表ニ年奈岐、和名抄十九卷  
ニ魚奈本、新撰字鏡ニ、右ノ骨皮ニ出セル武奈  
伎ヲ慶元以來ノ先達イツレモ今世ノ鰓鱧ト曰物也ト思ハ  
誤シ、武奈伎ノ名義ヲ弁明セズ且中古以來ウナギト喚  
カツル誤ニ引レテミダリニ如此オシアテタル也然ラバ武奈  
伎ハ何物ゾト云ニ必今世ノ八月ウナギナレシ女澄ハ今世自  
ウナギトイハル物也、鰓鱧ノ如ク領下ニ同合シテ水ヲモラスノ

鰓ハ骨ニ領下  
トナリ魚ノ領下  
門アハハノ領下  
ハ果ナレハ人ノ骨  
トナリハハハノ骨  
トハハハハハハハ  
アキトトハハハハ  
鰓ノ如クシテコ  
水ノ出ルマ  
ノ如クハハハハ  
ノ心ニテ骨ナ  
ナリ、骨ノ骨ハ  
細ク咽トハハ  
ハハハハハハハ  
ハハハハハハハ

鰓ナクシテ目ヲ難ル、事一寸許リ、胸ノ左右ニ連リテ小孔  
十四アリテ呼吸スル毎ニ此小孔ヨリ水ヲ洩ス事也、鰓鱧  
ノ鰓ノ如シ然レハ小孔トハイ一尺女実ハ鰓也、又此魚ノ口ナ  
ウナギトハチガヒ筒口ニシテ水中ニアル時ハ此筒口ニテ石垣ナドニヒ  
ト喰付テ尾光ヲヒラクト動揺スル、骨一バ、骨ニ付ル海藻  
ノ浪ニ漂ルルガ如シ、後世人ハ此魚ノ左右ノ鰓ノ形ヲト見テ八月  
ニ似タル故、等因ニ八月ウナギト呼ナレ、古人ハヨク女形状ヲ詳ニ  
シテ右ノ十四ノ鰓ノ領下ニツカズニテ胸ノ左右ニ如此多ク連  
ナレ、口ナリ、口ニ異ナレハ女形状ヨリテ、鰓ノ形ニ名  
ヲ負ヒツルヲ云、鰓トハ、鰓メテ、ムナギト云リ、也、又、人言、



古ノ名ニ及歴ニ功能アリテ今ハ八目ウナギモ又ハ此ノ府産ニ即テリト云フ病ニ及歴ニ功能アリテ今ハ八目ウナギモ又ハ此ノ府産ニ即テリト云フ病ニ及歴ニ功能アリテ今ハ八目ウナギモ又ハ此ノ府産ニ即テリト云フ

上字ニ及歴アレハ下ハ自ラ略キ呼ル、習ヒテ及歴ハ凡クオトト云ベキヲハニオノ誤アレハオヲ略キテ凡トト云ル如ク也  
今ハ八目ウナギノ形状ト古ノ武查伎ノ名義ト右ノ如ク符ヲ合セ  
然レバ古ノ武查伎ハ今ノ八目ウナギナルヲ聊モ疑ヒ有カラス今ノ  
鰻荒ノ形状ハ右ノ胸鰓ノ至トハ絶テ合サルヲ以テ全ク別物  
ナルヲ考一定ス

武查伎ノ漢名未詳

武查伎ハ今ノ八目ウナギ事右ニ云ルカ如ク相漢名ヲ求ルニ未  
其詳ヲ得ズ本中和名下卷ニ鰻、鰻鰓、鰻鰓魚、鰻鰓魚

鰻鰓魚、ヲ和名年志岐ト我セ和名抄十九卷ニ鰻、鰻魚、鰻  
鰓、鰻鰓、鰻鰓魚、ヲ和名魚志本ト注ニ新撰字鏡ニ鰻、  
鰻魚、ヲムナキト奉ラレタリ然レテ充タル魚ノ種類一ナラズ  
又是ラノ魚ノ形状ヒトツモ今ノ胸鰓ノ名義ニ叶ハイツレモ  
誤トス

字查伎ト呼カシ出灰

武查伎ハ胸鰓ナレバ必ムナキト云ベキ理リナルヲウナギトシモ誤  
リシハイツノ比ヨリ、故詳ナラズモ長年本草ニ鰻魚、和名字  
查支ト載タレバハヤク此已前ヨリ呼カシト云是ニ次テハ尺  
查往來ニ鰻、塩囊抄ニ鰻、下学集ニ鰻、雜字記ニ鰻、



鯧、鰯、鰯、鰯、字流集ニ鮮ト載リ是モ漢字ハ其人ノ心ニ  
ニ前ノ本十和名和名抄字流ホヨリテ訓ハ古中己後ノ謬  
名ヲ充ヌトミユレハ漢名ノ当否ハ論スベキニ非ス又ウナギトハレ  
ル元来武太伎ヲ呼誤リタルレバ其比ノハ今世ノ鰯鰯ニアラジ因テ  
唯武ヲ字ト呼カハツル出天ニ引出オクヤ

鰯ヲ八目ウナギト訓ハ誤

武太伎ノ漢名詳ナラシ事既ニ上ニイリ後世人ハ武太伎ノ名ヲ  
解得サレハ別ニ八目ウナギト呼ナシ来レド是亦漢名詳ナラズ二  
先達ノ説アルモ皆誤ナレハ次ニ是ヲ存ス  
多識編四卷、鰯魚、今葉や豆米宇那岐、異名黃鰯、是鰯

字ヲヤツメウナギト訓ル始歟今葉トアルヲミレハ此先生ノ始テ充  
ラレタルナルハ是ニ次テハ訓蒙図彙十四卷、やつめうなぎ  
鰯、鰯魚、黃鰯、本朝食鑑卷九、八目鰯、集解、是鰯也  
廣海本草卷八、鰯魚、和名ヤツメウナギトアリ然レド鰯ハ  
八目ウナギニ非サルト貝石所香月所既ニ是ヲ取セラレ又傳本ナ  
卷十三、八目鰯、鰯ノ条下ニ云世俗ニ鰯ヲヤツメウナギト訓ズ未是  
鰯ハ別物ナリ、春懐食鏡ニ八目宇那哉、陸益梅、倭俗以鰯  
訓之、非也、  
ナルヨシ云レタリ

鰯魚ヲヤツメウナギト云ルハ誤



用菜頂知後編卷四、七里大鳥魚、一名里魚、一名烏鯉魚、  
一名鱧魚、和ニ八目ウナギト呼ブ道家三厨ノ一也、小兒疳ニ好  
一名鱧魚、山海名産因會四卷、八目鰻ノ条下ニ是ヲ并ニテ  
云本中個目ニ鱧ト云ハ眼旁ニ七ツノ星ト云ニ付今此魚ニ充テ  
リ或云今モ漢渡ノ鱧ハ一名里鯉魚トイヒテ形鱧ニ似テ小  
鱗大キク眼傍ニ七ツノ星アリ全身脂黒色ニシテ深黒色ノ  
斑在アリ人長崎ニ来リ是ヲ九星魚ト云然レモ是ハ七ツ也  
和産ニアルトナシ如菴先生八目鰻ニ充タルハ誤ヤ云是ヲ以  
白クカレモ八目鰻ノ八星モ非ス斑在ニモアラス小孔ニシテ  
鱧ナリ  
因會ノ作者其由ヲ弁セサレバ是モ詞ヲラスステ今迄ノ先考  
此魚ノ小孔ヲ鰓ヤトイルトニ心ツカズ唯先ノ書ニスカリテ誤ヲナ  
セル故ニ的當ノ解ナシ

八目ウナギノ目ハ目ニ非ス鰓也

八目ウナギノ胸ノ両方ニアル小孔ハ鰓ニテ水ヲ洩スルノ目ニ似タル故  
ニ俗ニ八目ト云リ本草學ノ諸先生出タルモイフモ是  
ヲ鰓也トイルヲ知ラズ又小孔ニ凡見ワキマズ只白点トシ  
思ヘリ故ニ胸鰓ノ古名アル事ヲ余一ズサマクノ謬説ヲナセ  
リ今其誤ヲ奉テ後來ノ鑑トス本朝食鑑云背有白  
點如目者八九子故歸八目鰻云云 倭本草云ウナギニ似  
テ白點如目ナルモノ八九アリ云云 卷懐命燒云此物似鰻鱈



白鮓有如目者八九ノ今所ノ見魚之九分一人テ此物  
ノ凡乾セルヲダニヨク見玉ハズ食滯ノ説ニ後ヒテ子因ニ白鮓  
九ハバト記サレシナルベシ香月ハモ亦九列ノ人ニテ此物ニ詳  
ナラズ師統ニ後ヒテ曰シサマニ書裁ラレルナルベシ若実ニ此物ヲ  
見ニニハイカデカ如此魯菜ナル形状ヲ記シオカレン今所ノ作者ハス  
テ品物ノ形状ヲトクテ其精詳ナレド此物ノ形状ヲ云レシハ甚  
疎漏ナル故次ニ此誤ヲ受ラレ又考シテ目ハツアレドモ  
本ノ目ハ二ツナリト是モ甚疎漏ナルカキサマシ若ノ書凡イツレモ  
先達ノ記シ置ルマ、ヲ次ニ後ヒ守リ實ニ此品物ヲ鑑定セザ  
ル故ニ此誤ヲイタセリタ、ト春前ノ細目ニ懸記ニ又有西脇生細

孔者俗謂之八目子蓋義トカレシハヨク叶一リサレド孔ニ非ズ  
鯉ナリト教十頭見レシ孔ノ數セウ九右ニテ十四也凡乾ノ物  
口ヨリ息ヲ吹イルニ忽此十四ノ小孔ヨリモ出又是ヲ八九トカレ  
ハヨク其數ヲカツヘミズ又腮ノトイルヲモ正シ考ヘザル故ナリ  
但馬ノ出石津方言ニ七月トイルハヨク叶一リ猶其事後ニ毒シク  
云ニシ

武吉伎トウナギト一物トスルノ誤

武吉伎ト今サウナギト一物ナラ又由ハ前条ニ毒ク并スルガ如シ然ルヲ  
訓蒙因彙十四卷ニ、いふよし、うんまし、鰻、鰻魚、鰻鱺、鰻、鰻  
鰻鱺ト記シ本初合證卷七ニ、鰻鱺魚、訓字取名、鰻、鰻、鰻、鰻



源順訓魚ナギ木中 幸謂魚ナギ木者、今之字ナギ伎ナギ、係  
本草卷十三、鱧鱓系下、又注夏病ヲ治ス、夏ヤセノコト也、  
カ十六卷、大伴家持歌ニ石戸名ニコレ物申ス、夏ヤセニヨシト云物  
ナギキトリメセ、トカレタルナド皆誤也

八目ウナギ名ノ出所

古今ノ八目ウナギハ古ノ魚ナギ伎ナギナリ、前ニオル如クナレド、後世ニ八目ウナギ  
ト云ル名ノ起源ハイハレ、時代ナラズ、唯多識編ニ鱧魚、今  
案也、豆米宇那岐、トアレハ此ハ前ヨリノ事ナルニシテ、ナギ出所  
ヲ見バ、進テ記シ添ナシ

鮮字ハアツラ子也、和訓ノ澄トナ事

漢字ノ充ナギラ子ハ既ニ云ルカ如シ、然シテ古ノ武ナギ伎ナギ、今ノ八目ウナギ  
ニ相違ナシト論定セルニ、純テ又一澄ヲ得ナリ、本草和名ニム  
ナギノ漢名ヲ鱧ト出シ、鱧ト鮮ト字體ハカレド、音ハヒンミテ同字ナリ、字ナギ、和名抄ニ鱧ト  
挙ラレタリ、右ノ鮮字、ムナギノ和名ニハ充ナギラ子也、其形状ノ似タルヨ  
リテ、当时ノ人々ハ如此充ナギラレタルナリ、お又後世多識編、訓蒙園  
彙、本朝倉鑑ハニ鮮字ヲヤツメウナギト訓シ、是モヤツメウナギニハ  
充ナギラ子也、其形状ノ書面ニミユル所ニ似タルニヨリテ、此人ハモ如此訓  
シタル、然ラハ古ノムナギノ形状、今ノヤツメウナギニ異ナラザル故ニ、和  
訓ナギコト古々ノケチメアレ、充ナギタルナギ、其ノ漢名古今同シキヲ以テ考フレバ、  
武ナギ伎ナギト八目ウナギト別物ナラヌノ一澄トナスナギニ非スヤ



八目ウナギ産地

八目ウナギハ北<sup>地</sup>河ノ魚ナリ 今北河<sup>地</sup>ノヨリ出シ凡<sup>ニ</sup>江ノニテ賣ルル  
ハ河<sup>地</sup>後河川ノ物多シ 魚鑑云ハ八目ウナギ快ウナギノ如ク左右各  
真眼一ツ眼子セツアリ故ニ八目ト云 真眼ハ物ヲ視 眼子ハ  
呼吸ヲ通スルノミ 漢名シレズ 河後河川ノ物ヲ上トス 寒中卵  
アルヲウナギト異トス 江戸ノ石川猫股川ニモ在トイリ 終  
二三寸ニシテ捕ルニセズ 之後ミツ汁ニ食ス 眼病者目ヲ治  
スニ弱小兒ニヨシ<sup>ク</sup> 此説ヨク叶レ凡<sup>ニ</sup>ウナギノ條下ニウナ  
ギ和名抄ニ鱧魚和名ムナギ一名ハジカミウナギイフ<sup>ク</sup> トカキニ  
ハ甚<sup>ニ</sup>ナキ杜撰ナリ 古ノウナギト今ノ<sup>ウナギ</sup>鱧トハ別ナルカト和名

抄ニ鱧魚ハシカミウナギトイル事絶<sup>テ</sup>ナシ 又山海名産圖會ニ  
信州河内湖ヨリ出ルコシ記セルハ甚<sup>ニ</sup>杜撰ナリ 其年ハ下ニ云ニ

因味魚胸臆手ノ説

此コト<sup>ハ</sup>因味<sup>ノ</sup>阿耨<sup>ノ</sup>和名抄<sup>ニ</sup>秘<sup>シ</sup>テ<sup>シ</sup>ニ<sup>シ</sup>ムナギハ胸臆手ト  
カレタリサレ<sup>ド</sup>モイカナル魚ヲク<sup>レ</sup>テ<sup>レ</sup>凡<sup>ニ</sup>説<sup>シ</sup>サレバ今<sup>ノ</sup>取用ヒタ<sup>シ</sup>ニ  
シ方ニナガラ胸臆手トイハレ<sup>ル</sup>三字<sup>ニ</sup>テ<sup>レ</sup>カ説<sup>ニ</sup>似<sup>タ</sup>レハ姑<sup>ク</sup>記  
載<sup>シ</sup>テ<sup>レ</sup>後考<sup>ニ</sup>備<sup>フ</sup>

但馬ヲ七目ト云

右ノ説<sup>ニ</sup>記<sup>シ</sup>終<sup>ル</sup>比<sup>ニ</sup>但馬<sup>ノ</sup>出<sup>ル</sup>石<sup>ノ</sup> 仙石<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup> 藩士河野通明<sup>ニ</sup>  
逢<sup>テ</sup>彼國<sup>ニ</sup>テ<sup>レ</sup>此魚<sup>ノ</sup>ヲ捕<sup>ル</sup>サマト此魚<sup>ノ</sup>ヲヌメル<sup>ノ</sup>サマトヲ<sup>レ</sup>詳<sup>ニ</sup>問



ツルニ跡予が胸臆ト云ル説ノ確證トナレハ洋ニ此ニ録ス

但馬ニテ此魚ヲ食スルハ朝夕ノ食料ニシテ必シモ江戸トノ如

クサメ餌トノミスルニ非ス又此魚ノ食料ニスキ時ハ四月比ヨリニテ

六七月コト迄ナリ此魚カノ國ニテハ城下近キ出石川トイル谷川ニ

スメリ昼ハ水ノ深处ニ隠レテ形ヲミセス夜半ニ淺流ニ廻リテ後

同ノ石ニ生タル青苔ヲ吸喰フニ中流ノ小石ニカシカ筒ニテヒシ

ト吸付テ青苔ヲ吸フヤハ尾ヲ下流ニ流

ニテ藻ノ糸ニ漂ルカ如ク三十モ五十モヨリ並ベテ喰付タル形

ヲ覺ズテイハハ繩籠ヲ水ニ打入レテ上ノ方ヲ物ニ懸キ留タル

カ如ク初ニセテ捕ントスル人同約四人ヲ若トス又故ハ西人松

明ヲ遊シテ左右ノ岸ヨリオリタテ振盪セバ一人サテテ下

流ニ沈メテ魚ノ落来ルヲ待ニ一人ハヤノ糸ノ口ヲソレテ石

ニ喰付タル味ニ至リ是ヲアゲテ是ヲ踏落セバ喰付ルハ

ニ難ルレモ再び及付ントモセズ又他ニ泳キ遊ントモセズ流ニ

從ヒテ流レ下リテカノ待波タルサテノ中ニ落入ルノ時夕

愚カナル魚ノ故ニ時ノ間ニ六七十頭ヲ捕得ルニ又常ノウ

キノ如ク物ニ纏ヒ付クナシ時トシテハカノ筒ニテ人ノ口ニ吸

付クアリ又口ニケレバ鉤ニカハラズ故ニ右ノ如ク石ニ付ルヲ踏

落シテ捕ル習ヒヤカク石ニ付テ青苔ヲ食トスル故ニ小

ル時ハ其色青クシテ其味モ青臭ニ大ニナレハ皮星色トナル



小ハ二三寸ヨリ大ハ三尺ニ餘レリ此魚卵ヲ沙石ニ産シオキ  
テ自然ニ化シテ魚トナル此魚ノ胸腹ノ左ニセツ右ニセツ小孔  
アル故ニヤカテ土人ハ七日ト呼テ江戸ニテ八日ウギトイル名アルヲ  
ニラズ是ハ真目ヲ除キテ此等ノ小孔目ニ似タル故ニカク呼ル  
也此小孔ノ孔毎ニ小キ腮アルヲ岩ノ魚ノ領下ノ腮ノ如シト  
イリ是余ノ胸<sup>ウナギ</sup>ノ名ヲ示ラシイルニヨク符合セリ此魚彼  
地ノ考食ナレド一痛焼ナド云テ考食セル店モナケレハ  
オノガ心ニ丸切ニ山掛醬油ハニ煮テ食ス骨アレド岩  
ノウナギノ如クナラス只太キ筋ノ如シ細吊アレド和ラカニシテ  
海<sup>ウナギ</sup>鰻魚ノ骨ノ如ク食スニシトイリ江戸川ニ生ヌル六七寸ノ

物モ尾サキヲ取テシコギ引バ骨ニハ非スニテ細キ筋ノ如キ物  
出ル也 **ウナギ**ニヨリテ考ルニ昔ハ此魚ノ大小ヲ筋ヲ以テ呼  
ブルヲウナギト名ヲ呼ハテヨリ今ノ鰻<sup>ウナギ</sup>ヲモ筋モテ呼ナシ  
来レルナルニ是 **ウナギ**ハ八日ウギノ本名ナルノ一證トスニ  
右ノ形状出所ハ河野氏ニシカラ捕一ミツカラ被理ニ其時ヲ浪  
試ミタル所ヲモテ予ニ注レル也 又サキニ山海名産圖會ノハ  
鰻ノ条ニ信州諏訪湖ヨリ出ルヨシヲ注シテ寒中氷ヲ穿  
テ長縄ヲハテ鉤シテ數十匹ヲ一度ニ釣<sup>ル</sup>固ヲ出セルヲ  
ミシカハ諏訪後ノ藩士數人ニ逢テ此事實ヤヤズト問シ  
ニ答シラズト答ニシカバ久シク疑ヲ貯ク居リシ今河野



氏ノ詳ナル談話ヲウテカノ國會ニ出セル説ハ全ク岩  
ノウチギヲ捕ルサマヲ土人ノ物語レルヲ今日ウキト同ヒカメ  
テ其マ、記載シ圖ヲモ作レルナル(シト發明セリ) 其故ハ  
但馬ヲハ梅雨申ヨリ七月比迄ヲ時トスト云ルニ彼書ニハ寒  
中ト云リ又後流ニスム魚ナルヲ被屑ニハ湖中ニ捕ト云リ又鉤ニ  
カ、ラストイヘルヲ 彼骨ニハ長繩ハ一テ鉤ニカレル圖ヲ出セリ猶  
ヨク諸國ノフヲ 國會ノ誤ヲ削ル(シ) 又但馬ヲ  
今日トイハズシテ七月ト云ルハヨク此形状ヲ知レル故也遠國ヲ其  
生物ヲミサル人ノ杜撰ニ白点目ノ如キ物八九アリナド書置  
ルト同ク 淺ニアラス

此圖山海名産國會ニ出シ



十 二 三 四 五 六 七 八 九 十

此圖山海名産國會ニ出シ  
八目鏡ヲトル圖トアレ此圖  
セルハウキノ鏡ヲミテ  
ニ非又八目ニハ等ノ如ク眼ナ  
レハ圖ノ如クトシ此圖ハ  
眼ノ倍ニ大ナルトシ左右ニハ  
若ノウチギノ圖ナルヲウチギ  
ナシ是ハ海人ノ等ノウチギ  
心ニテ海リシヲ海人ハウチ  
心ニテ海リシヲ海人ハウチ  
アラン 故オオヨリニ同テ  
ト云ニテナル圖ヲ作リシナル  
目ニモ若ノウチギトミルナリ  
此等ノ作者國傳ニヨリカ  
有、皆柳澤行脚ノ人ナリ  
見及ルニ、其ノ如ク、  
此等ノ如ク、其ノ如ク、  
此等ノ如ク、其ノ如ク、

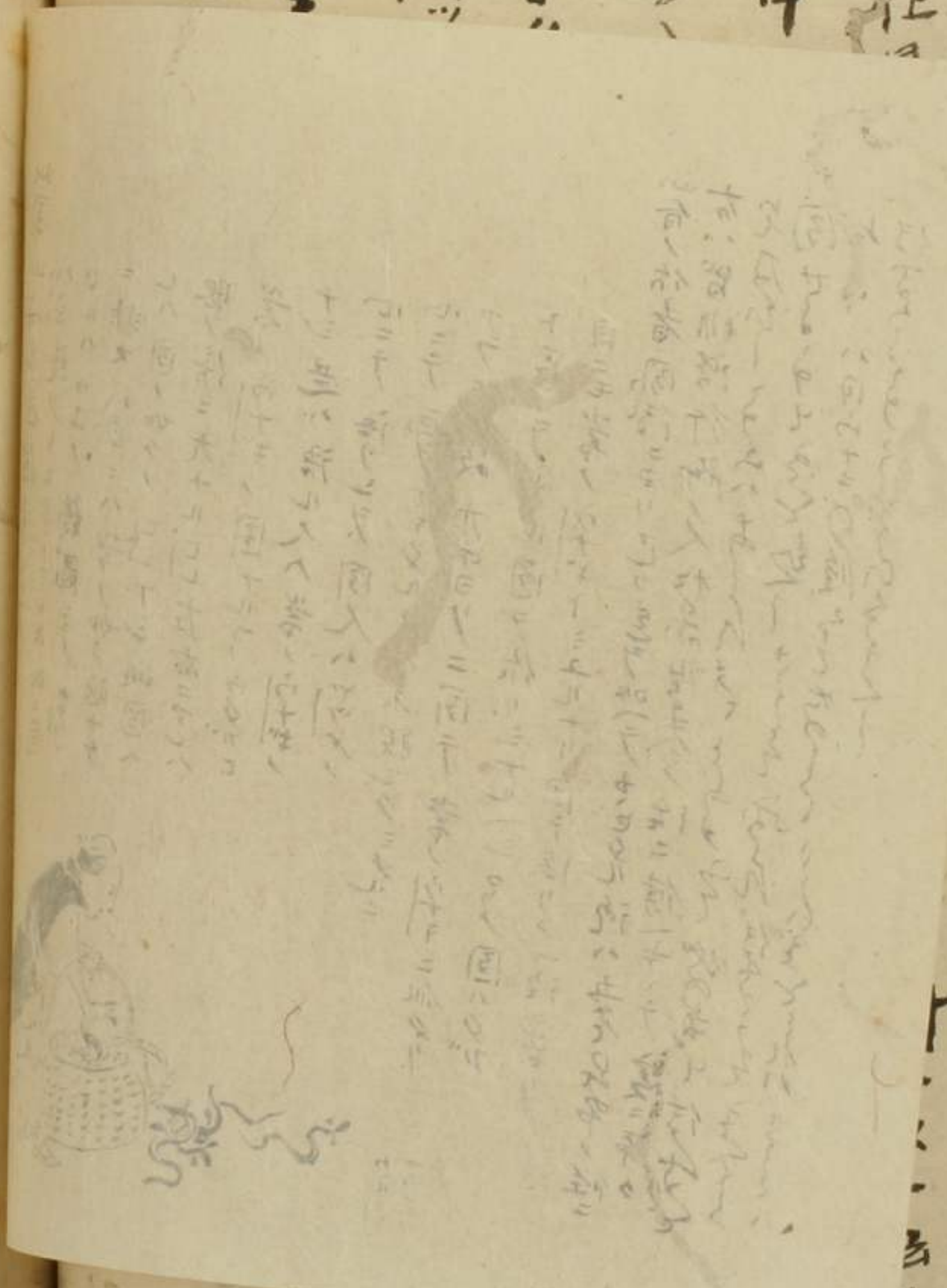
徒ノ白魚、今日ノ上ニミテ 誰シラ又者モナケレバカ、ル一微  
虫、一功徒ヲダニタテナバ、其余ノ功徒ヲ、弘ク他ニ求ントテ

此混合ニテ、其  
ルニシ、其レ、其  
テオボツカナキ  
有トイ、一、其  
ナル、ケレ、其  
病ヲ治セサルノミ  
ナキノ如キ、其  
一、其、其



氏ノ詳カナル談話ヲウテカノ國會ニ出セル況ハ全ク岩  
ノウチギヲ捕ルサマヲ土人ノ物語レルヲハツ同ウナギト同ヒカメ  
テサマノ記載シ圖ヲモ作レルナル(シト)發明セリ。其故ハ

但中カヨハ



又但馬  
也遠國  
アリナド書置

ハツ同ウナギ印能

譯名ノ詳ニ知ルヘキハ其漢名ヲ弁別シテ彼此混合シテ其  
印能ヲ考フル寸ハ今日ニ益アルヲ又數倍ナルニシテ然レモ譯  
名ノ詳ナラサルハ其テ奇僻ノ書ヲ撰處シテオボツカナキ  
漢名ヲ充シテ無益ノ極ナルニシテ奇僻ノ層トイハレ撰處  
シテモシ其ニ的宜白ノ物ヲ得バ一ツノ印ナルケレモ自然  
充タサテ彼登ニ出タル經驗ヲ用ヒバ病ヲ治セサルノミ  
ナラズ中ニ害ヲ招クナカチトナルニハツ同ウナギノ如キ其印  
能ノ的然タルヲ今日ノ上ニシテ誰シラヌ者モナケレバカ、ル一微  
虫一印能ヲダニタテナバ其余ノ印能ヲ弘ク他ニ求ントテ



身仰ノ骨ヲ押盡シテ浮名ヲ好ント致スルハ益ノワザ  
也此益ノ功能既ニ前條ニモミエタレド先達ノ諸君ニ書置  
レシヲ纂集シテコニ附記ニ披盡ノ便トス

本朝合鑑表九、八目鱧、主治、出積、疔瘡、及小兒疳傷、

附方、小兒疳眼、及雀目者、車前草、連葉根、洗淨、

燒存性、乃霜、擦炙鮮肉而食之、或用耒薑汁、煮熟鮮

肉、捻車前霜ハハ、亦好

春懷食鏡云此物治小兒疳積雀目殺虫、

用莖頂知後編表三、小兒疳ニ妙ナリ

度傳本草卷八云、小兒五疳、及口眼目ノ莖

飲腫摘要云、小兒疳積雀目ヲ治ス

万葉集ニ石ノ名ニ我物申ス夏瘦ニヨシトフモノゾ、無茶伎トリセ

今世小兒ノ疳積アル者夏ニ至リテ多ク瘦ルヤ古ノニナギノ功

能今ノニナギ、異、アラニシ

傳本草



○世間通用字

但馬國  
出石川

捕七月魚

一入  
サアニテ  
落ル魚  
ヲスクヒトル

一入  
石右ヨリ  
招キテ  
フリテラス

一入  
受ミテ石  
吸付ル  
魚ヲ踏  
ミ落ス

一入  
石右ヨリ  
松木ヲ  
フリテラス





波之加美伊手考

目次

- 波之加美伊手ハ今世ノウキヤ
- 波之加夕 子名義
- 宇那支ト呼カタル始
- 今世ノウキニ鰻鱺ノ字ヲ充タル始
- 鰻親魚ハ波之加美伊手ト云ル也
- 山楸魚トハミカミウヲトハ別物
- 或同
- 世間通用字





波之加美伊字考

波之加美伊字ハ今世ノナキ也

本草和名下卷、鰻鱺魚、和名波之加美伊字、  
九卷、鰻鱺魚、和名波之加美伊字、  
長平本草云、鰻鱺魚、和名波之加美伊字、  
下学集上卷、鰻鱺魚、伊波  
字類抄ニ鰻鱺魚、是ラノ書ニヨリテ考レバ古  
マテ、ヨカミイヲト云ル物ノ漢名ハ鰻鱺魚、  
ト云ル物ニカヒナケレバ、今世ノウナギハ古  
ノハミカミイヲナル、  
破モ、  
此類ニナル、  
若シ、  
此類ニナル、  
古、  
一、  
武、  
使、  
トイ、  
ル物、  
今世



ノウナギニ非カニルフ是亦辨ヲマズシテ明ラカナルニ

波之加美伊手ノ名義

波之加美伊手ノ名義ヲ考ルニ蜀椒ヨク此魚ノ毒ヲ割ル故歟  
古人此魚ヲ喰フニ必蜀椒ヲ添ルナラント思フ澄ハ澄類本草  
之、食医心経云主五痔痔瘡殺虫方、鰻鱺魚一頭治如食法  
却成疔灸着林塩醬調和食ノトアリ此代ハ事漢土ノ  
樹ヲ後ヒ守リシ故山ノ一ノ食フモ必右ノ法ヲモ取用ヒシルハ  
又自然ニ暗合セシモルニ今世モ此魚ヲ喰フニ蜀椒ヲ添ルハ  
オシナヘテノ習俗也又蜀椒ノ煎汁ヲ海岸ニ携ヘユキテ此魚ノ  
ヌメル六ニソノギ入ルバ其氣ニ不堪シテヤカテ六ヨリハヒ出ルヲオサ

テ捕ルトイリ蜀椒ヲハミカミトイルハ本草和名下卷ニ蜀椒  
和名布佐皮之加美シ和名抄ハ卷ニ蜀椒和名太田皮  
之加美一云下佐皮之加美トニエタリ

波之加美ノ事

鰻鱺ヲ鰻鱺ト呼カタルハイツノ比ヨリノ事歟詳ナラズ  
古樞橈骨ヲ節用集ニ泥鰻、鰻鱺トアレバ寛永戊寅上木ノ真草  
ニ行ノ節用集ニハコヨリノ事歟又以前ヨリ歟サレハ是ハ鰻字  
ヲモ同訓ニヨメバウナギハ猶昔寛永戊寅波之加美ノ心ニテ鰻鱺ヲモ  
同物ト思ヒ誤リテヨメタル歟今ヨリシテハ其是非ハ  
知ベカラス只鰻鱺字ヲ宇那支トヨミ始ニ出所ハ出オクヤ



今世ノ字奈文ニ鰻鱺ノ字ヲ充ル始

多減縮四字、鰻鱺魚、宇那岐、異名白鰻、細目蛇魚

、コ、ニ宇那岐ト奉レシハ必今世ノウナギニシテ中古以

来ノ層ニ此ニ依リテ宇那岐ト呼カレル物トハ異ナル

一ニ且此ハ少目ウナギハ別ニ鮮魚、今世、ヤ豆米宇那岐、異名黄

鰻トアレバ、也、シラハ鰻鱺ヲ今世ノウナギノ漢名ト定メラレ

ルハ此先生ニ始、ニキ牧是ヨリ後品物ノ字スル人ノ鰻

鱺トヨメルハイツレモ山先生ノ証ヲ示ル也、自榮スルニ鰻鱺ヲ

古ヨリハニカミイラトヨミ来、ツレニ本草ニ載タル鰻鱺ノ形状

ヲヨクミルニ今ノウナギニカヒナキ上ニ葛用集ニ鰻鱺ノ形状

夫ニ從ヒテ先生モカク訓ヲ付シタル牧然アル時ハ古用集

作者ノ心ハ知ラシキ也、鰻鱺ヲウナギトヨメルハ節用集ヲ始メ

トイフベキニヤ

鰻、鰻ク、皮ニ加美付手ト云ル辨

本草和名下卷、鰻鱺魚、仁譜上音莫安、及、下カ号及、鰻、音秋、相似而、短、出陶是注、鰻魚

音法難及、和名岐之加美山手、上ニハニカミイラトイルハ鰻鱺魚

ノ注、其以下ハ似タル物ヲ類ニ聚セルニテ、鰻ヲモ鰻魚ヲモハニカミ

イラトイルニ非ス、其種ハ鰻ノ注ニ、此ト云ルニテ同物ナラヌ

明白ナリ、又鰻魚ノ注ニ、有、此トアルニテ是モ別物ナリ、論ヲ

マタズ、和名抄ニ此層ヲ引ル、此ア、マタニユルニ鰻鱺魚ノ條ニ鰻







ル下如此ナレハ其餘取所ハ幾クモナシ又倭本草鯉条下ニ  
能上木、山楸樹皮ヲ食フニ、山名産園ハ、其ノ木  
ノ氣アリ又楸樹ニホリ樹皮ヲトリ食トアレバ此魚ノ名ハ是ヨリ  
復ルナルキニ此合ニ、山楸樹皮ヲ彼ルカ如シト云ルハ異説ニ  
イヅルモ古ノハミカミイヲ今ノサセウヲトセルハ誤也近世物産  
家ニテハ物理小識ノ高山原里魚ヲモテ山楸魚ニ充テ又

或問

或問云今是下、説ノ後、テ古ノ武藝伝ハ今ノ八目ウナギニシテ  
今ノウナギハ古ノハミカミイナル事始テ發明シタレバ、其ノ古  
ヨシ有テ歟古ノウナギノ名ヲ今ノ魚ニ呼移シテハミカミイヲノ名ハ

絶ハテツラシ法其説ヲ同ニ、吾云古人ノ武藝伎ト云ニテ中古  
以来、宇那岐、呼ナレバ猶其比ハ、今ノ鰻鱺ニ非ズモトノマ、  
ノ八目ウナギノ事ハリミソ、八目ウナギハ味重クヨニカラズ今ノ鰻鱺  
味輕クウマキガ、一形ニ似テ其即結モオトラ子ハ都下ノ人ハハッ  
目ウナギノ腥氣ヲ厭ヒテ今ノ鰻鱺ヲ、食料トシ茶餌トセシユ  
後ハ其即結ヲ賞シテ古ノウナギノ名ヲ今ノウナギニ呼移シ  
テハミカミイヲノ名ヲハミカミイニ呼クスナクナリ遂ニハウナギノ名ヲ  
今ノ鰻鱺ニ取ラシテ古ノウナギノ名ハ別ニハツ目ウナギト呼移メシ  
ナルベシ名ヲ呼移又例ハ、エビト云テ、エビカツラ、ハ四山中、ト  
ノ草ハ漢名藜藎ナルヲ、後ニ海土ヨリ葡萄ヲワタセル時







